

少し以前「Let it go/ありのままの」という歌をよく耳にした。ビートルズの「Let it be/なすがままに」を聴いたのは精神的危機を迎える14歳(河合隼雄の説)、生意気中学生はこの「Let it be」で学校や友情といった同調圧力に抗った。

英語の「Let it go」や「Let it be」にはとりわけ、社会の抑圧や強要に屈しない、孤独な冒険が暗示されているらしい。生意気中学生の直感、いいじゃないか。

「Let it be」の人、聖書の人物では誰であろうか。何とんでも母マリアではないか。彼女は「お言葉どおりこの身になりますように(ルカ 1:38)」と天使に答え、その決断は自己保身や世間体を木端微塵にする命懸けのものであった。信仰とは、往々にして、マリアのような歩み方ではないだろうか。

「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。「これらの出来事」とは何か。マリアは何を「心に納めて思い巡らしていた」のか。

家畜小屋でイエスを産んだ日(2:7)の深夜、羊飼いたちが息せき切って扉を叩き現れたこと。また天使からの受胎告知(1:31)を思い出し、マタイ福音書の報告も付け加えるなら同日の夜半、異様な風体の東方の学者らが忽然と現れたこと(マタイ 2:11)。これらを「心に納めた」のであろう。

「心に納めた」からといって、自らに起こっている不可思議は納得できまい。それゆえに「思い巡らしていた(ルカ 2:19)」。ここが大事なのだ。

12年後イエスの身勝手少年ぶりが現された時、マリアは半泣き声でイエスを叱った(2:48)。親としてのうっかりぶりはさておいて(2:43~44)、人の流れにぶつかりながら都へ戻り(2:45)、迷子になった少年を三日間も捜し回ったとなれば(2:46)、蒼白だった顔面を真っ赤にして怒るのも当然だろう。

この時のイエスの答えが実にこましゃくれている。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家(神殿)にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか(2:49)」。これには父も母も啞然となり、口をあぐり開けたまま「イエスの言葉の意味が分らなかった(2:50)」。

半ば半狂乱になった心の動揺が納まって帰郷すると、「母はこれらのことをすべて心に納めていた(2:51)」。

こうして眺めてみると、マリアはごく普通のおっかさんだ。とはいえ一方で、謎めいた出来事を拒絶せず、盲従せず、「心に納める」ことができる柔らかな母であった。これは非常に重要。

原典の「心に納めて思い巡らす(2:19)」を直訳的に敷衍するなら、「それ自体を心で自問自答し続ける」とも言えようか。「思い巡らせる」には(他者と)語り合うという意味もあり、そのように事柄が深められる。

マリアは己が無知を平然と自覚していた(論語)。ゆえに不可思議を「心に納め」、「Let it be/なすがままに」自らを神に従わせることができた。

用意された地図、納得した路線を進むのではない。心に納められた謎を「なすがままに」漂わせ、それに自らがついていく。

信仰とは、聖霊の風に吹かれるまま進む生き方。聖霊の「なすがままに」だから、整備された陸路を往くより、海路の旅なのか。

「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし神に従う人は信仰によって生きる(ハバクク 2:4)」。罪人たる私たちは正しくなくても、恵みをマリアのごとく「心に納めて」信仰によって生きる。



《おまけのひとこと》

どこへ漂着しても神が創造された世界 だから生きることができる 漂泊途上は新鮮な風景と見知らぬ人に助けられる それでやって来たし やっていけるのは 世に恵みが満ちているからだろう